

排水性の改善による小豆の安定生産を目指して

京都府内の小豆栽培では、生育期間中の秋雨や台風の大雨による湿害で、収量が安定しないという問題があります。

そこで、当センターでは、小豆の安定生産の実現を目指して、開花期前の畦間サブソイラ^{けいかん}※¹による耕うんが土壌水分へ及ぼす影響を調査しています。

畦間サブソイラを用いることにより、表面排水を促し、降雨後に生じる滞水等による過湿状態から適切な水分状態への速やかな移行が期待されます。

この技術が小豆の生育に及ぼす影響を評価するため、収穫期調査を行いました。今後、土壌水分の推移と小豆の生育・収量との関係性を解析していきます。

※¹ 畦間サブソイラ:畝間^{うねま}にナイフを入れ、トラクターで牽引^{けんいん}することで亀裂が作られる機械



トラクターで畦間サブソイラを牽引している様子
(右下は牽引跡を横から見た図)



収穫期調査の様子

京都府蔬菜原種審査会:審査会に出品された品種の立毛、収穫物の調査

第68回京都府^{そさいげんしゅ}蔬菜原種^{かんらん}審査会(年内どり甘藍)を開催

11月22日、当センターで年内どり^{かんらん}甘藍^{※1}を対象とした京都府^{そさい}蔬菜^{※2}原種^{げんしゅ}^{※3}審査会を開催しました。本審査会は現場での生産に適した優良野菜品種の開発普及を促進することを目的に京都府種苗協会が主催するもので、当センターは審査に向けた栽培と審査会の運営及び審査を務めました。

当日は、府内種苗会社5社から出品された12品種について、農林センター園芸部、農産課、各種苗会社、卸売会社の審査員12名が、ほ場での生育状況及び収穫物を審査した結果、生育の揃いが良く、外観や形状が優れた3品種を入賞品種として選定しました。

この審査会は、毎年2品目について実施しています。今年度は、年内どり^{かんらん}甘藍に加え、7月29日に白毛エダマメについて実施しました。

- ※1^{かんらん}甘藍:キャベツ
- ※2^{そさい}蔬菜:野菜
- ※3^{げんしゅ}原種:販売用に増殖を行う前の種子



^{たちげ}立毛審査の様子



1等に入賞した^{かんらん}甘藍

京かんざしに使用できる除草剤を目指す

農薬登録拡大の試験（作物残留試験）

個々の農薬には「使用できる作物」や「使用方法」が決められていて、使用者はそれを遵守しなければなりません。

南丹地域で栽培される「京かんざし」（根も葉も食べられる、若どりの金時にんじん）については、現在、使用が認められている除草剤が無い[※]ため、除草作業の省力化を望む生産者から除草剤の登録拡大[※]が求められています。

そこで、当センターでは、にんじんで農薬登録されている除草剤について、作物残留試験及び薬効・薬害試験を行ない、その登録拡大を目指しています。

作物残留試験では、除草剤を散布した畑から収穫したサンプル中に残留する農薬成分を分析し、登録拡大に必要なデータを収集しています。

※ 「京かんざし」は、通常のにんじんとは栽培形態・利用形態が異なるため、「にんじん（葉）」という別カテゴリーの登録が必要となります。



除草剤の散布（^{ほしゅ}播種2日後、土壌全面散布）



分析機器（HPLC-UV）

丹波くりの食味試験、食べ比べの評点調査を実施

当センターでは、収益性の高い魅力ある丹波くり^{※1}の生産振興を図るため、栗の消費拡大をねらいとして栗の主要品種の食味に関する調査研究に取り組んでいます。

今年度は、在来品種と近年開発の品種等を加えた9品種を対象とし、2日間で2回の食味試験を実施しました。1回目は、センター内で行ったものでセンター内の職員や町役場の職員に試食をお願いしました。2回目は、京都市内に出て各界の方々をお願いしました。

食味試験の調査方法は、同じ条件でゆで上げた栗を食べ比べる評点法としました。いずれの品種の丹波くりも今シーズンの収穫後に氷蔵処理^{※2}され、一般に収穫時よりも糖度を増したものとなっています。それでも調査の結果は、品種によりおいしさの評点には歴然とした違いが現われました。男女による食感の差もあるようです。

この調査結果から今後は、食味のよい品種をしばりこみ、その生産普及を図ることで、高品質な丹波くりが高価格で取引される魅力ある栗生産の拡大につなげていきたいと考えています。

※1「丹波くり」は、丹波地方で産出された栗の総称であり、品種名ではありません。

※2「氷蔵処理」とは、氷蔵庫を用いて-2℃で貯蔵することで、栗を食害する虫を殺す方法。ガスで虫を殺す方法の代替技術として当センターが開発したもので、食味や保存性を高めることもできる。



センター内で食味試験の様子
(11月16日)



京都市内で食味試験の様子
(11月17日)

加工向け夏まきレタスの最適な栽培方法を検討

丹後地域では、国営開発農地を中心にキャベツ等のアブラナ科野菜の加工用契約栽培が推進されています。しかし、アブラナ科野菜の連作が進むにつれ、根こぶ病の多発等、連作障害が問題となっています。

そこで当所では、アブラナ科以外の品目としてニンジン、レタス等を取り上げ、連作障害回避作物として現地へ導入できるよう検討を行っています。レタスでは、昨年度の試験結果から選定した2品種について、今年度は播種時期と施肥量を変えた試験を実施しています。

今回、収穫期となったため、球重や球の締まり具合（球緊度）を調査しました。今後は、加工業者にサンプルを提供し、加工への適性を評価してもらい、最適な品種や栽培方法の検討に活用していきます。



収穫を待つレタス



収穫調査では、半分に切って、中の締まり具合を確認します。

宇治茶実践型学舎4期生入舎式

当所は、宇治茶生産の担い手を確保し、新規茶業経営者の育成を図るため、令和元年度に「宇治茶実践型学舎」を設立し、京都府内での就業・就農を推進しています。

このたび、令和4年11月10日に令和4年度宇治茶実践型学舎入舎式を執り行い、新たに4期生1名が入舎しました。入舎生は、非農家出身ですが、宇治茶の栽培や製造に強い関心を持ち、約1ヶ月間の就農インターンシップ研修を経て、茶業での就農を目指すことを決意しました。

これから当所では、茶業経営に必要な茶園管理、製茶加工に関する基礎的な知識や技術の研修と就農予定地における先進農家の元での現地実習などを組み合わせた2年間のカリキュラムを通じて、入舎生のスムーズな就農に向けた準備を支援します。



出席者に紹介される入舎生



茶業の発展に努めると宣誓する入舎生

京都府茶園品評会の審査員を務めました

11月7日(月)から4日間にわたり、府内各地域において、2022年度京都府優良品種茶園品評会の審査が京都府茶生産協議会の主催により開催されました。

この品評会は、茶園の優良品種化^{*}と環境に配慮した栽培技術の改善により、特質ある宇治茶の生産と品質向上を図り、本府茶業の振興発展に寄与することを目的としています。今回、審査対象となった41点の茶園は、いずれもすばらしい出来映えであり、審査員は出品者の努力に応えるように厳正・公平に審査を行いました。当所から3名の研究員が審査長及び審査員として出席し、茶樹の生育や管理状況を確認して他の審査員に伝えるなど、審査運営の中心的な役割を担いました。

今回の審査結果を受けて、令和5年2月10日(金)に表彰式が執り行われる予定です。当所は今後も、宇治茶の生産振興を多角的に支援します。

※優良品種化：地域や気候に適した品種に転換し収量性と高品質を確保すること



茶園の生育や管理状況を確認する審査員

農林センター(茶業研究所)

試験研究課題: 黒大豆エダマメを栽培する大規模営農組織における栽培技

術体系の確立と販売力の向上(1)環境負荷を低減する持続可能な管理技術の開発

黒ダイズにおける土壌伝染性病害の発生実態を調査

京都府内の黒ダイズでは、栽培初期から収穫期まで土壌伝染性病害の黒根腐病、白絹病、茎疫病などが発生します。本病害に感染すると株は枯死し、収量は大きく低下します。本病害の府内での発生実態については、不明な点が多いことから、7～11月にかけて生産者及び普及センターの協力を得て、黒ダイズの主産地である丹後、中丹及び南丹地域の20カ所の現地ほ場において発病調査を行いました。

調査の結果、土壌伝染性病害の発生は、年次、地域及びほ場間で差が大きく、発生する病害の種類も年によって異なることが分かりました。今後は、調査結果をまとめるとともに、各地域及びほ場ごとに防除対策の構築を図ります。



立枯株(連続で発生する)



甚発ほ場

試験研究課題: 酒造適性と収量性を向上させた新しい酒造好適米の育成と
安定生産技術の確立

酒米新品種の^{げんげんしゅ}原々種 候補を選抜

京都府独自の酒米品種「祝」は、府内の酒造メーカーで広く利用されていますが、収量が低いこと、醸造過程で米が割れやすいことが問題となり、大吟醸に適した品質改良の要望が上がっています。そこで当センターでは、これらの問題を解決するため、令和4年6月に新しい品種の「祝」を育成しました。

新品種の普及に当たっては、品種の特性を継続的に安定して発揮させるため、母本^{げんげんしゅ}※1として原々種^{げんげんしゅ}※2を選抜し、維持する必要があります。そこで、11月18日に、関係職員が集まり、原々種候補から、有望な個体を選抜しました。

今後は、新しい「祝」を生産現場に普及するために必要な栽培技術の確立を進めます。

※1 母本 : 種子生産するための植物体のこと。

※2 原々種^{げんげんしゅ} : 種子生産を行うための、大本となる元株及びその種子



株(左)及び玄米(右)の形状などを見て有望系統・個体を選抜

令和4年度獣医学術年次大会にて研究成果を発表

11月11日から13日にかけて、獣医学術年次大会がアジア獣医師会連合大会と合同で実施され、世界各国から多くの獣医師等が福岡市に集合し、最新の知見について発表や意見交換を行いました。

当センターからは、獣医学術近畿地区学会にて優秀賞に選ばれた「畜舎周囲消毒のための液状剤自動散布装置の開発」について発表を行い、会場からは風の影響や価格について等、多くの質問と共に「発泡剤を用いることで効力が長続きするのは」といったアドバイスもいただきました。

鳥インフルエンザ等の伝染病対策のための消石灰散布は重要である一方で農家の大きな負担となっており、消毒剤の散布を自動化することで労力を軽減できることから、今回いただいた意見を参考に実用化試験を実施し、いち早く農家のみなさまへ成果を還元できるよう今後も精力的に研究を進めてまいります。



発表の様子

養殖用アカモク種苗の沖出し

近年、全国的に需要の拡大している食用海藻の「アカモク」ですが、天然ものは資源の年変動が大きく、ほとんど収穫できない年もあります。そのため、京都府では生産の安定化を目指してアカモクの「養殖」を推進しており、海洋センターでは、独自に開発した技術を用いて漁業者に配布する養殖用種苗の生産と、養殖指導を行っています。今年度は、アカモクの種苗生産期に異常高水温に見舞われましたが、当センターで開発した海水の簡易冷却システムを用いて高水温期を乗り越え、無事に種苗配布要望数(約3万本)を確保することができました。

養殖アカモク的一大漁場である宮津市の養老地区では、10月中旬から11月初旬にかけて種苗の沖出し※作業が行われました。収穫期となる2～3月には、10～15トン程度の水揚げが見込まれます。

※ 沖出し:陸上の水槽で生産した種苗を大きく育てるため、ロープに取り付け(種付け)海の養殖施設に設置すること。



種苗設置(種付け)の様子



種苗沖出しの様子